

メタファー写像における主観的パースペクティブ Subjective Perspectives on Metaphorical Mappings

高嶋 由布子[†]
Yufuko TAKASHIMA

[†]京都大学 人間・環境学研究科 / 日本学術振興会
Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University / JSPS
takashima@hi.h.kyoto-u.ac.jp

Abstract

This article deals with the conceptual metaphor theory and its invariance principle (Lakoff 1993). This study discusses that the ontology of mental and emotional domain as target domain has originally its subjective perspective and restricts metaphorical mappings from more concrete and physical domains which represent based on objective perspective.

Keywords — conceptual metaphor, perspective, deixis, aspect

1. はじめに—概念メタファーと不変性原理、サキ領域からの制約とは？

認知言語学における概念メタファー論は、具体的・身体的経験の構造を投射して、抽象的概念や、心的な事象を理解するという説である。メタファー的写像はモト領域から、投射先のサキ領域の本来の構造と矛盾しないように起こり、一致しないものは適用されないという不変性原理(Lakoff 1993)に基づく。モト領域から与えられる構造に理解に基づくという強い概念メタファー論をとると、サキ領域にもともとある構造からの制約と呼ばれるものの存在は論理矛盾に陥る。しかし、心的領域・抽象概念の領域にももともとの構造は存在し、制約を与えていると主張されてきた。では、これらサキ領域がもつ構造は何に基づき、これと具体的領域との相違点とはなんだろうか。

そこで私は、メタファー写像の投射先としての心的領域での言語表現を観察した。主観的表現の人称制約については、池上(2003)で指摘されているように自己言及表現「私は悲しい」は頻出するが、三人称表現「彼は悲しい」は小説のような場でしか用いられず、外からの視点「彼は悲しんでいる(ように見える)」をとるのが普通である。この現象から、心的領域では自己の視点の反映した自己中心的パースペクティブをとり、メタファー

的投射によって拡張された表現に、このパースペクティブがサキ領域からの制約としてあらわれるのではないかと仮定して分析を行った。

2. 心的ドメインでの視点の反映

具体的領域でのモノゴトの構造は、自己は外側からの観察者であり、表現に含まれない客観的視点からの叙述が多い。一方、心的領域では外部からの影響によったりよらなかつたりする自己の状態の変化についての言及となる。

たとえば「釘を刺す」は慣習的に具体領域で意味は理解可能だが、心的領域での例しかない(国立国語研究所 BCCWJ2008 コーパスでの調査による)。具体的領域では「釘を打つ」という様態を伴う活動のAspectを持つ動詞が用いられ、「刺す」は到達のAspectも持ち、結果状態「刺さる」という自動詞との対応がある。これに視点の取り方が反映していると考えられる。

(1) 板に釘を{打った/?刺した}

(2) 母は娘に貞淑であれと釘を{*打った/刺した}

「心」「胸」にまつわる表現について BCCWJ2008 から検索された用例に基づいて分析した。

2.1. 心: ターゲットドメインの構造

(3) 喜び{に心があふれる/??が心をあふれさせた}

心はある種の導管を通してさわれる容器というイメージスキーマ「心を通じ合う」と、移動できる内容物としてのイメージ双方から理解される。前者の容器の解釈では(3)に類する自動詞的表現が多くなるが、内容物では、他者への操作「心を{つかむ/奪う}」、自己の操作「心を{失う/売る}」がある。受け身に出来るかについて、前者では「奪われる」など頻出するが、後者では「売られる」などは使われない。

2.2. 胸: メトニミーとメタファー

- (4) a. *彼女の一言が胸を刺した
b. 彼女の一言に胸を刺された
c. 彼女の一言が胸を{??打った/#叩いた}
d. 彼女の一言に胸を打たれた

(4a,c)のように、客観的な視点をとる他動詞の文は容認されにくい。「叩く」などだと具体的事態としか解釈されない。主観的な意味には受け身的な文が選好される。これは、視点が心的影響を受ける経験者である「私」すなわち背景にいるこの文を述べた人間にあるからである。ゆえに(5)のように外側からの視点をとる表現にする場合、容認度が上がることがある。しかし自他対応がある場合、客観的な視点から表現するとき、「刺す」より結果を表す自動詞の「刺さる」がより好まれる。

- (5) a.彼女の一言が彼の胸を {打った/*刺した}
b.彼女の一言が彼の胸に刺さった (ようだ)

(6)彼の笑顔が胸に{焼き付いた/*燃えついた}
胸は中間段階として、自己に内在される心の容器としての地位と、外界との心的な接触の場としての役割を担っていて、(6)内側のプロセスの様態を含まない結果状態にも言及できると分析される。

3. 接触動詞: メトニミーからメタファー

外界の事象に使われる〈接触〉の動詞(さわる、ふれる)の心的意味への意味拡張においては、心的領域で意味する表現が、他者から自己へ向かってくるパースペクティヴをとるとき、感情的意味を付加されやすいことが観察できる。これはメトニミーに基づくメタファー的拡張と考えられる。

自他同型動詞の「さわる/ふれる」は客観的事態を表しているので、主体が手を伸ばして触る主体的な「母が私のほおにさわる」、誰かに触られる「水面を手でふれた」、主体が不在の他者同士の接触「手と手が触れている」も表現することもできる。これらは感情的にニュートラルであるといえる。

- (7) a.だれかの手がお尻にさわっている
a'.私の手が誰かの尻に(偶然)触れた(だけだ)
b.痴漢にお尻をさわられる

(7a)が客観的事実を述べる表現であるのに対し、(7b)の受身形は他者の自己への接触に負の感情が

含意として読み込まれる。つまり視点が何か「される」自己からの視点になっているので、「さわられた」ことに対して、何か感情を持ったことを解釈しやすい。

このときとくに「さわる」が心的領域へ情報が入ってくるというパースペクティヴを持つときは、「〈何かいやな行為・情報〉が〈誰かの心的領域〉に接触」するという意味を持つ。接触した結果として、気分が変わったところまでを意味する。ゆえに(9)のような「触られる」は意味過剰になり容認されない。

(8)彼の発言が{気/古傷}にさわる

(9)*彼に私の気を触られる

4. 結果と考察

以上、心的領域にメタファー的投射される際、外から何か〈影響を被る〉主体が視点を取り、問題の中心となる表現については、他者が自分に何かすることより気分が変わったことなどを表すようになる。このため完了的な意味を持つ自動詞が選好されたり、受け身形が使われたりする。

心的領域では、自己が常に中心におり、外的事象に対し価値付与を行い、感情的な変化が起こったことを表すことが多い。概念メタファー理論で感情を表すサキ領域をもつ投射と考えられる事象では、主観的な領域での視点の取り方がサキ領域からの制約として意味拡張後の表現の統語的偏りに反映されることが結論として得られた。

参考文献

- [1] Lakoff, G., (1993) "The Contemporary Theory of Metaphor", A. Orthon(y) (ed.) *Metaphor and Thought* (2nd ed.) pp.202-251.
[2] Lakoff, G & M. Johnson, (1999) *Philosophy in the Flesh*. Basic Books.
[3] 池上嘉彦, (2003) "言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(1)", *認知言語学論考*, No. 3, pp. 1-49.
[4] 松本曜, (2006) "語におけるメタファーの意味の実現とその制約", *認知言語学論考*, No. 6, pp. 49-93.